

第二項 大正以降時代

爾後ノ進歩ノ梗概左ノ如シ

一、大正元年十二月一等驅逐艦浦風及江風ノ二隻ヲ英國耶社ニ注文シ翌二年十月起工セシガ江風ハ間モ無ク其ノ製造ヲ中止セリ魚雷發射管ハ五十三糧ニ聯裝發射管ニ基ニシテ茲ニ始メテ我海軍ニ五十三糧徑發射管裝備ノ驅逐艦ヲ見タリ

(備考)

當時我國ニハ已ニ海風、山風ノ如キ優秀驅逐艦ヲ建造シ得ル狀況ニ於テ特ニ浦風、江風ノ二驅逐艦ヲ英國ニ注文セシ事情ヲ述ベンニ之ヨリ先キ歐洲諸國ニ於テハ船用機關トシテ「ヂーセル」機械出現シ航線距離延長ノ目的ニ對シ成功シツツアルヲ認メタルヲ以テ我海軍ハ巡航用トシテ「ヂーセル」機械ヲ中央軸ニ裝備セル特種驅逐艦ヲ計畫セシメ同時ニ當時ノ英國最新工作

法ヲ知ルテ主トシニ驅逐艦ノ註文ヲ敢テセルモノナリ然ルニ英會社ニテハ「チーセル」機械ヲ他國ニ註文シ其ノ完成遅レタル爲浦風ハ之ヲ裝備スベキ室ニ重油槽ヲ假設ノ上歸國セシガ其ノ後「チーセル」機械ハ別個ニ着邦セシモ本驅逐艦ニ裝備スルニ至ラズ結局當初ノ目的以外ノ出來架ヘトナリシモノナルモ本驅逐艦ノ外國建造ニ依リ後記澤風以下風級驅逐艦ノ計畫上ニ利用セラレタル所少ナカラズ特ニ我國驅逐艦中五十三種發射管裝備ノ第一艦トシテ魚雷兵裝及魚雷取扱竝ニ發射法上寄與セル所尠ナカラズ

江風ハ建造工程中世界大戰トナリ聯合國側作戦ヲ有利ニ導ク爲伊太利ニ讓渡シ代艦ハ内國ニテ建造セルモノナリ

因ミニ記ス明治三十三年驅逐艦及曉ノ二隻ヲ英國ニ註文當時内一隻ニ「パーソン、タービン」ヲ裝備スルコトトシ製造會社トノ交渉經リシガ一部ノ反對ニ會シ沙汰止ミトナリシハ前節三十二年「タルピン」水雷艇註文ト共ニ括目スベキ事例ナリ

二、大正二年將來ノ一等驅逐艦々型ヲ左ノ如ク豫定セリ

排水量 一〇〇〇噸、速力三十五節以上

兵裝 四五種二聯裝發射管 二―三基

四、七吋二、三吋砲五

之ニ依リ生レタルモノハ大正四年七月建造令達ノ天津風級四隻ニシテ雷裝ハ四五種二聯裝發射管

三基、砲裝ハ四、七吋砲四門ニ變更セラレ速力三四節ナリ

三、大正三年十二月二十八日二等驅逐艦々型ニ關シ左ノ通令達セリ

自今新造ノ二等驅逐艦々型ハ別紙艦型樣裝調查委員會決議成案ニ據ル儀ト心得ベシ（官房機密 第一五九九號）
排水量八〇〇噸、速力三一節、航續力一五節三〇〇哩、四十五種三聯裝發射管二基、

一二種砲三門、機銃二門、七五糶探照燈一基

重量區分 船體艤裝三一〇噸、兵器六五噸、機關三一〇噸、油六噸、需品五一噸、計八〇〇噸

四、大正六年補充計畫ニ依ル決定案左ノ如シ

大型驅逐艦一三五〇噸、中型驅逐艦八五〇噸

大正七年一月起工ノ峯風級ハ當該大型驅逐艦ナリ從來ノ夫レニ比シ魚雷兵裝ニ於テ傑出シ五十三糶發射管六門(二聯裝三基)ヲ有シ尙其ノ速力ニ於テ偉大ノ進歩ヲ劃セル點ニ注目スベシ蓋シ當時米國巡洋戰艦ノ速力三十五節(計劃中)ト稱セラルルニ對シ之ニ順應セントスルニアリ

之ヨリ先キ前記天津風級ニ次ギ大正六年江風、谷風ノ二艦ヲ起工セシガ其ノ兵裝ハ天津風級ニ等シク唯速力ニ於テ峯風級ニ一步ヲ近ツキタルモノナリ

二等驅逐艦ニ於テ櫻級ヨリ改良櫻型タル權級(六六五噸 兵裝櫻ニ同シ)トナリ大正五年桃級(八三五噸 四十五糶三聯裝二基)ノ起工大正七年樅級(八五〇噸 五十三糶二聯裝二基)ニ進歩シ速力亦之ニ副フ

(備考)峯風級及樅級ハ我國ニ於テ重油専燒罐及「オール、ギヤード、タルピン」ヲ裝備セル最初ノ驅逐艦ナリ

五、大正八年補充計劃立案ニ際シ左記理由ニ依リ一等驅逐艦約一六〇〇噸二等驅逐艦九五〇噸ノ目

途ヲ以テ立案セシガ事故ニ依リ之ヲ中止シ舊型ヲ襲ギ局部的改善ヲ行フコトナレリ(後記)

(記)

驅逐艦々型ハ各種艦艇ノ速力増進ニ伴ヒ優速ヲ保持スルノ必要上漸次形體ヲ増大スルニ至レリ然ルニ一方ニ於テハ夜戦ヲ以テ

第一義トスベキ驅逐艦形體ノ増大ハ潜行性ヲ減退セシムルモノト認メラレ彼此利害相容レザル處ニシテ列國共ニ約千噸ヲ以テ標準トスルモノノ如シ帝國海軍ニ於テハ其ノ形式ヲ二種ニ分チ一等二等トシ將來モ亦此ノ方針ヲ以テ建造セラルルコトト思考ス而シテ從來一般ノ觀察ニ從フトキハ一等驅逐艦ハ其ノ優速ナルノ理由ヲ以テ甚戰ニ利ニシテ二等驅逐艦ハ其ノ形體ノ小ナル所以ヲ以テ夜戰ニ利ナルモノト思惟セラレタリ然ルニ之ヲ戰技ノ實況ニ照ラスニ彼我視認距離差ハ主トシテ煤煙ノ濃淡ニ左右セラレ夜間襲撃ノ難易成敗ハ前記ノ豫想ニ反シ石炭專燒タル三等驅逐艦最モ不利ニシテ晴天ノ暗夜ニ於テ五千乃至六千米ヨリ自己ニ先チ敵ニ發見セラルルテ常トセリ而シテ炭油混燒ノ二等驅逐艦之ニ亞ギ重油專燒ノ一等驅逐艦ニ至リテハ他二艦種ニ超越シ夜間戰鬪發射ノ大部ヲ通ジ敵ニ發見セラルルコトナク射點ヲ獲得スルヲ得タリ加之速力ノ優越、發射管ノ多數、魚雷能力ノ大ナルハ益々襲撃ヲ容易確實ナラシムルヲ實證セリ由是觀之將來艦體少許ノ増大ノ如キハ深ク意トスルニ足ラズ速力竝ニ耐波性ノ優越ト兵裝ノ完備ニ重キヲ置キ一層優勢ナル艦型ヲ以テ有利トスベク魚雷兵裝ニ關シ之ヲ射法上ヨリ見ルトキハ夜戰ニ於テ六射線、晝戰ニ於テ九射線(發射管)ヲ以テ標準ト見ルベシ(大正八年海軍教育本部意見)

六、大正九年三月左記理由ニ依リ八年度以降ノ一等驅逐艦及九年度以降ノ二等驅逐艦ハ別圖(略)ニ

依リ艦橋兵裝ノ一部ヲ變更スルコトニ決裁セリ

驅逐艦裝備ノ砲類魚雷ハ其ノ射程一萬五千米以上ニ増進シ現供給ノ一、五米測距儀ハ一層長壽線ノモノト換裝スルノ餘儀ナキ狀況ニ在リ然ルニ近來艦橋前面ニ防風硝子窓ヲ設クル等ノ爲益々適當ナル測距儀裝備位置ヲ失ヘリ乃チ從來艦橋ニ裝備セシ七十五糎探照燈ヲ廢シ照明彈採用ノ今日戰鬪用トシテハ主トシテ後部探照燈一基ニヨリ出入港及艦ノ保安等ニハ四十糎探照燈ヲ前艦橋ニ備フ斯クテ兵裝一部ノ變更ト共ニ艦橋及探照燈臺ヲ擴大シ艦ノ操縱、砲火指揮及見張員ヲ配スル等ニ便シ且連日ノ對敵行動中必要ナル艦長休憩室ヲ備フ而シテ從來ノ艦橋ニ測距儀及七十五糎探照燈ヲ備ヘシ場所ハ四呎×四呎ナリシヲ四呎×六呎トシ代フルニ二米測距儀及四十糎探照燈ヲ裝備ス前艦橋甲板ヲ



ノ太線ノ如ク改ム

又大正九年末驅逐艦々型ニ關シ海軍々々令部ハ次ノ如ク要望セリ

(一) 驅逐艦々型ト重油問題

重油供給ノ困難ヒシキ今日ナルモ十年年度建造着手ノ大型二隻ハ不取敢油專燒ニ決定セリ尙重油問題解決セザレバ十一年度着手ノ驅逐艦ヨリ混燒型ニ變更シタキ一部ノ意見アルモ驅逐艦ノ重油專燒ハ用兵上ノ絶對要求ニテ數ニ於テ想定敵國ノ三分一ニモ足ラザルモノニ對シ實質ノ低下ヲ求ムルハ到底同意シ能ハザル所ナリ

(二) 想定敵國主力艦ノ水中防禦發達シ五十三種魚雷ヲ以テハ與フル損害過小ナルベキガ故ニ裝藥量ヲ三〇〇斤以上ニ増シ且雷速ヲ増大シ命中率ノ増加ヲ圖ランガ爲六十一種魚雷ヲ成ルベク早キ時機ニ於テ驅逐艦ニ採用シ度キ意見ナリ之ガ爲排水量ノ増加約百噸ニ及バン

此外艦ノ橫動ヲ改善シ實速力ヲ計畫速力ニ近カラシムル等ノ爲排水量ハ大型一六〇〇噸附近トナルベシ

(三) 中型驅逐艦ハ魚雷能力速力、耐波性等不足シ充分ノ活動ヲ期待シ難キガ故ニ第一線部隊ハ大型ノミヲ以テ編制スルヲ必要トスルコト水雷界一致ノ意見ナリ故ニ艦型増大ノ時機ニ於テ中型ヲ大型ニ改ムルヲ要ス

而シテ右ノ要望ノ下ニ大正十年年度建造大中型驅逐艦ハ九年度建造ノ夫レニ對シ左記ノ變更ヲ加フルコトトナレリ

一、九年度建造ノモノニ比シ大型驅逐艦ニ於テ艦幅九呎中型ニ於テ艦幅六呎ヲ増大ス

峯風級及桃級以來ノ驅逐艦ニ於テ轉舵ノ際艦體ノ傾斜稍大ナル傾向アリ之ヲ匡正センガ爲艦幅ヲ増シ復原力ヲ大ニセントス之ガ爲船體重量ノ増加ハ止ムヲ得ザルモノトス

二、大型驅逐艦ニ於テ三番十二種砲ヲ四番十二種砲ノ直前ニ移ス

從來ノ三番砲位置宜ヲ得ザリシ爲彈藥ノ供給不如意ナリシ缺點アリシヲ以テ別圖(略)ノ如ク其ノ位置ヲ移動シ彈藥供給ヲ容易ナラシメムトス之ニ伴ヒ二、三番聯裝發射管ノ位置ヲ少シク變更セリ

三、排水量及速力ヲ次頁要目ノ通定ム

一、二項變更ノ結果トシテ排水量及速力ニ及ボス影響ハ輕微ナルモ峯風級及樞級驅逐艦共ニ船體、機關、兵器等ノ重量何レモ豫定計畫ヲ超過スルコト左ノ如ク比較的多大ニシテ而モ之ヲ輕減スルノ見込ナキヲ以テ十年度建造ノモノニアリテハ初ヨリ之ヲ計畫排水量中ニ加算スルヲ至當ト認ム從ツテ速力亦減少スルヲ免レズ

四、改正要目

型別	船體		機關		兵器		上記以外ノ重量		計
	大	中	大	中	大	中	大	中	
大型	約一八噸	約一〇噸	約一〇噸	約一三噸	約四噸	約四五噸			
中型	約二六噸	約一二噸	約二噸	約四噸	約四四噸				

要目	大型艦		中型艦	
	在來艦	十年度計畫艦	在來艦	十年度計畫艦
垂線間長サ(呎吋)	三三〇一〇	同上	二七五一〇	同上
幅(同)	二九一三	三〇一〇	二六一〇	二六一六
深(同)	一九一〇	同上	一六一三	同上
平均吃水(同)	九一六	九一七	八一〇	八一三
排水量(噸)	一、三四五	一、四〇〇	八五〇	九〇〇
速力(節)	三九	三七、二五	三六	三四

大正十年十二月起工大正十一年十二月竣工ノ一等驅逐艦第一驅逐艦(神風ト改稱)同十年十二月起工十一年九月竣工ノ二等驅逐艦第二驅逐艦(若竹ト改稱)ハ即チ夫々右ノ要望ヲ充足セル第一艦ナリ

七、大正十一年二月華府軍縮會議ノ成果ニ鑑ミ驅逐艦々型及所要能力等ニ就テモ攻究セララル所アリ將來驅逐艦ハ大型驅逐艦ノミ建造ノコトニ決セリ

先ニ三十七、八年戰役ヲ終リ戰役ノ教訓ヲ利用スルニ當リ實戰ノ教訓及將來戰ノ趨勢ニ鑑ミ大型(一等)中型(二等)ノ特種兩型整備方針ノ下ニ先ヅ海風型艦型トナリ爾來之ヲ持續セシガ其ノ眼晴トスル處ハ兩者共相當ノ航洋性ヲ具備シツツ比較的夜間襲撃ニ適スベキモノ即チ中型ト畫間強襲ニ適スベキモノ即チ大型ノ二型ヲ必要トスル見地ニ立チシモノナルガ爾後十餘年ニ亘ル實地的試練ニ依ルニ光學兵器ノ進歩ハ驅逐艦々型上ノ多少ノ大小ハ殆ド視認距離即潛航性ニ關セザルヲ實證セシヲ以テ大克ク小ヲ兼ヌルノ主旨ニ依リ寧ロ大型一種ヲ整備スルニ若カズト爲スニ在リ此ノ種意見ハ夙ニ實施部隊側ヨリ提唱セラレツツアリシモノナリ

大正十一年十月海軍々令部主宰ノ下ニ驅逐艦々型會議ヲ開催セリ參會者ハ海上部隊關係主要職員海軍省、海軍々令部、海軍水雷學校等ノ關係者ニシテ多數意見ヲ要約スレバ概ネ左記ノ如クニシテ驅逐艦トシテノ最良艦型ニ就キ別項ノ決議ヲ見タリ

- (一) 速力 射點獲得及對巡自衛上ニ燃料ニテ四〇節ヲ必要トス
- (二) 砲 煩 十二櫃四門及八櫃高角砲一門
- (三) 魚 雷 六十一櫃三聯裝ニ基魚雷十二個

(四) 航續力 現狀ノ約二割増

(五) 排水量 速力四十節ヲ得ルヲ目標トシテ二千乃至二千四百噸

所要性能具備ノ爲ニハ數ノ減少ハ之ヲ忍ブベシ

決議、驅逐艦ノ最良艦型トシテハ魚雷襲撃ヲ専務トスルモノニシテ速力四十節六十一種魚雷六射線以上砲ハ二聯裝十二種砲二

基但敵ガ五吋砲ヲ有スルモノトセバ速力ヲ減殺セザル範圍ニ於テ五吋砲ヲ搭載ス外ニ八種高角砲一門ヲ搭載スルコト凌

波性ハ現在ノ驅逐艦ヨリ良好ニシテ船體機關ヲ堅實ナラシメ尙出來得レバ艦型ヲ小ニス

右ニ對シ海軍々令部ハ實行問題トシテ左記理由ニ依リ前記理想的艦型ノ採用ハ次期計畫ニ讓ルベシト爲シ其ノ結果既定計畫ハ一四三〇噸型ヲ以テ續行スルコトナレリ

(一) 一四三〇噸型ノ全速三七、二五節 $\frac{1}{2}$ 燃料ニ對スル減速約一、五節ナリ假ニ $\frac{1}{2}$ 燃料ニテ全速力三十五節ヲ得ルトセバ編隊速力三

十二節トスルコトヲ得ベシ之ニ對シ米國「オマハ」級 $\frac{1}{2}$ 燃料全速三十三節七ニシテ編隊速力ハ三十一乃至三十二節ナルベシ

(二) 三、四節ノ高速力ハ射點獲得問題解決ノ絕對條件ニアラス

(三) 數ノ要求極メテ切ナルモノアリ

尙本會議ニ於テ「千四百噸程度ノ驅逐艦トシテノ最良ノ艦型」ニ關シ決議セル要領左ノ如シ

艦型項目	決	議	主	要	意	見
砲種類及數	十二種砲 三十五種機砲	四門 二門	一、搭載砲全部ヲ高角式トスベシ 二、八種高角砲一門搭載ノ要アリ 三、聯裝砲ト爲スヲ可トス 四、五吋砲ノ採用ヲ可トス	彈藥搭載數増加ノ要アリ		

砲熳裝備位置	測距儀ノ種類及數	測距儀ノ裝備位置	魚雷ノ種類	發射管ノ種類及數	發射管ノ裝備位置	豫備魚雷數
<p>野風級ヲ可トス 但聯裝砲實用上差支ナキ曉ニハ更ニ考慮ノ要アリ</p>	<p>二米半一、一米半一、六十種一、 艦橋ニ於テ使用差支ナケレバ一米半更ニ一</p>	<p>野風級ヲ可トス</p>	<p>六十一種</p>	<p>三聯裝二基 十二年度驅逐艦ヨリ機械ノ重量輕減セシ爲 六十一種三聯裝二基ヲ採用シ得ルニ至レリ 排水量ノ増加三十噸、速力減退^{1/4}、節航續 力ニ影響ナシ (註)發射管一門十三噸、魚雷一本二噸半</p>	<p>旋回度 前後十五度 位置 略現在ノ場所 重量ノ許ス範圍ニ於テ防波楯ヲ附スルコト モ研究</p>	<p>常備一個、豫備一個</p>
<p>一、高速力ノ際艦首砲ノ使用殆ド不可能ナリ故ニ 艦首砲ハ後部探照燈ノ位置ニ移シ艦首ニハ高 角砲ヲ備フベシ 二、艦首砲ノ威力ハ棄テ難シ艦首ヲ高クシ砲座ヲ 高ムレバ可ナリ</p>			<p>已成驅逐艦モ六十一種ニ改ムベシ 二聯裝二基ニテモ宜シ</p>	<p>一、發射管ニハ爆風除ケ、波除ケ、風除ケトシテ 楯ヲ附スルコト必要ナリ發射管員ノミヲ保護 セバ可ナリ 二、爆風除ケハ非常ニ重量大ナリ驅逐艦ニテハ上 部ニ重量増加ハ考物ナリ 三、發射管ノ上ニ天井ヲ張ルコトヲ希望ス</p>	<p>發射管ノ旋回ヲ前後十五度ニ止メ得レバ管ノ高サ ヲ減ジ重量ヲ小ナラシメ得ベシ</p>	

<p>適當ナル掃海具</p>	<p>水雷戰隊ノ内一個驅逐隊ニ三號掃海具、他ノ三隊ニ二號掃海具</p>	<p>一、掃海用驅逐隊ハ別ニ之ヲ設ケ水雷戰隊ニ掃海ヲ兼ネシムルハ不可不適ナリ 二、三號掃海具ノミニテ可ナリ 三、二號三號ハ用途ヲ異ニスル故兩方共必要ナリ</p>
<p>機雷裝備標準</p>	<p>三號掃海具ヲ搭載セザルモノニ十六個乃至二十個搭載ス</p>	<p>機雷ノ效果ニ就キ根本的解決ノ要アリ</p>
<p>機雷落下裝置裝備位置</p>	<p>機雷ノ減少ニ伴ヒ適當ナル裝備位置及方法研究ノコト</p>	<p>機雷ハ旋回俯仰式トナスヲ可トス</p>
<p>爆雷投射機裝備位置</p>	<p>重量及餘裕ノ許ス限り二門ヲ成ルベク後部ニ搭載ス</p>	<p>一、驅逐艦ハ軍艦ノ如ク夜間點燈砲戰スルコト無ク襲撃時目標照射又ハ航海用ナリ後部ニハ不要ナリ 二、探照燈臺ハ砲火指揮専用トスベシ以下一反對意見</p>
<p>爆雷搭載標準</p>	<p>爆雷十四個乃至十八個ト豫定スルモ重量並ニ餘積ノ許ス限り増加スルコトトス</p>	<p>一、應逐艦ハ軍艦ノ如ク夜間點燈砲戰スルコト無ク襲撃時目標照射又ハ航海用ナリ後部ニハ不要ナリ 二、探照燈臺ハ砲火指揮専用トスベシ以下一反對意見</p>
<p>探照燈ノ種類及數</p>	<p>前部ニ四〇燈 一 後部ニ七十五燈「スベリー」 一</p>	<p>一、應逐艦ハ軍艦ノ如ク夜間點燈砲戰スルコト無ク襲撃時目標照射又ハ航海用ナリ後部ニハ不要ナリ 二、探照燈臺ハ砲火指揮専用トスベシ以下一反對意見</p>
<p>航續力増加改良案</p>	<p>倉庫ヲ縮小シ重油庫ヲ増設方研究</p>	<p>一、應逐艦ハ軍艦ノ如ク夜間點燈砲戰スルコト無ク襲撃時目標照射又ハ航海用ナリ後部ニハ不要ナリ 二、探照燈臺ハ砲火指揮専用トスベシ以下一反對意見</p>
<p>艦室内海水浸水防止案</p>	<p>周圍ニ支柱ヲ建テ幕ヲ張ル</p>	<p>一、應逐艦ハ軍艦ノ如ク夜間點燈砲戰スルコト無ク襲撃時目標照射又ハ航海用ナリ後部ニハ不要ナリ 二、探照燈臺ハ砲火指揮専用トスベシ以下一反對意見</p>

煙突熱氣防止改良案	煙突ノ位置變更及傾斜ヲ増ス
方位盤射擊裝置	試驗ノ上装着ノ方針

之ヨリ先キ戰技訓練ノ進歩徹底味ハ駁々欸マズ大正八年以來從來ノ基隊戰技ニ代フルニ戰隊戰技ヲ以テシ大正十年以來戰技優勝旗授與ノ制ヲ中止シ專ラ實戰的ニシテ且研究の猛訓練ニ精進セシ結果水雷戰術竝ニ魚雷射法等ニ相當ノ革進ヲ來シ水雷艦艇ノ主座ヲ占ムル一等驅逐艦ノ魚雷兵裝ハ到底現狀ニ甘ズベカラザルノ聲彌々瑣ビシク他方軍縮會議ノ結果個艦威力ノ優越ヲ企圖スルノ要益々切ナルモノアリ前驅驅逐艦會議ニ於ケル一般的要望ニモ鑑ミ終ニ同年十二月ニ至リ大正十二年度以降建造一等驅逐艦兵裝トシテ五十三艘二聯裝發射管三基ノ代リニ六十一艘三聯裝發射管二基ヲ搭載スルコトニ高裁ヲ經タリ改裝理由等左ノ如シ

戦近戦艦、巡洋戦艦水中防禦ハ著シク強度ヲ増シタル爲五十三艘魚雷炸薬ニテハ其ノ威力不十分ナルト將來ノ戦闘ニ於テ驅逐艦ヲ以テ相當ノ遠距離ニ於テ魚雷ヲ使用スル場合出來得ル限り高キ雷速及優良ナル命中精度ヲ得ンガ爲ニハ五十三艘魚雷ヲ以テシテハ其ノ能力不十分ナルトノ二點ヨリ將來ノ一等驅逐艦ニハ六十一艘魚雷ヲ採用スルヲ最得策ナリトスベシ然ルニ從來ノ一等驅逐艦ニ在リテハ復原力ノ關係上重量大ナル六十一艘魚雷ノ採用ハ到底不可能ナリシガ第十一驅逐艦以降ノ一等驅逐艦ニ於テハ主機械ノ配置ニ改正アリ機關重心點ニ低下ヲ來セシニ依リ現在ノ艦型共ノ儘ニテ排水量ノ大ナル増加ナク又速力ノ差シタル減少ナクシテ六十一艘魚雷ヲ搭載シ得ルニ至レリ之レ木兵裝變更ヲ爲サントスル所以ナリ

(參考)五十三艘二聯裝三基ニ代フルニ六十一艘三聯裝發射管二基ヲ裝備シ搭載魚雷總數ヲ十二個トス又本改裝ニ依リ排水量ニ於

テ三十噸ヲ増加シ其ノ結果トシテ最高速力ニ於テ約^一/_二節ヲ減ズ

因ニ本改装ハ第十一、第十三、第十五、第十七號ノ四艦ヲ除ケル大正十二年度以降建造ノ一等驅逐艦ニ適用セラレタリ即チ第十九號驅逐艦(改稱睦月)ヨリ實施(大正十二年五月起工大正十五年三月竣工)セリ

附録第五參照

大正十三年四月十八日海軍々令部長山下源太郎ハ海軍大臣村上格一宛驅逐艦々型ニ關シ左ノ通商議セリ蓋シ吹雪型大型驅逐艦計畫ノ淵源ナリ

震災ニ依ル事業繰延ベノ結果既定計畫ニ屬スル驅逐艦ノ大半ハ十五年度以後ニ竣工ノコトト可相成候處一方驅逐艦々型増大、威力増進ハ既ニ佛國海軍ニ於テ開始セラレ此ノ趨勢ハ遠カラズ英米ニモ波及スベク從ツテ我海軍ニシテ依然從來ノ艦型ヲ踏襲セバ前記驅逐艦ノ多數ハ海上出現ノ日ヲ待タズシテ舊式ニ屬スル結果ヲ見ルベシト被存候個艦威力ノ優越ハ我造艦政策ノ生命ニシテ就中驅逐艦ニ在リテハ尨大ナル米國ノ兵力ニ對抗上特ニ之ガ必要ヲ感ジ補充計畫ニハ大型驅逐艦三十六隻ヲ計上セル次第ニ候處前線内外ノ事情ヲ考慮スルニ既定計畫ニ屬スル驅逐艦ニ就テモ此ノ際其ノ一部ヲ大型ニ變更スルハ最モ時宜ニ適スル措置ト認メ候條之ガ實行方可然御配慮相成度

追テ右大型驅逐艦ハ用兵上別紙艦型標準ニ依リ建造スルヲ適當ト認ム

驅逐艦型標準

排水量 一九〇〇噸附近

砲 煩 十三種砲四門以上各百二十發、八種高角砲一門各百五十發

發射管 六十一種三聯裝三基每門魚雷數二本

探照燈 七十五種一基 四十五種一基

無線電信 三吉

速力 $\frac{2}{3}$ 燃料ニテ三十九節

航續距離 十四節四千哩

(備考)

一、前記ノ外現行標準ニ依リ一號機雷、爆雷兵裝、掃海具、及水中聽音器ヲ裝ス

二、十三種砲ハ仰角四十五度トス

三、普通滿載狀態ニ於ケル航續距離ヲ四千哩トシ必要ノ場合ニハ十四節五千哩ニ對スル燃料ヲ搭載シ得ル如ク豫備燃料庫ヲ設ク

乃チ大正十四年二月二十四日一等驅逐艦々型ヲ左ノ如ク變更スルコトニ裁決セラレタリ主要々目左ノ如シ

一、基準排水量

一、六五〇噸

二、速力

$\frac{2}{3}$ 燃料ニテ三八、〇節

三、航續距離

十四節四千哩

四、砲 熾

五十口徑十三種砲

聯裝 三基

四種機砲

四門

又ハ四十口徑八種高角砲

一門

右ニ對スル彈藥數

十三種一門

一二〇發以上

五、魚 雷
 八糎高角砲 一五〇發以上
 六十一糎 三聯裝 三基

右一門魚雷數 二個

六、探照燈 七十五糎一基 三十糎信號用二基

七、無線電信 三吉

前記ノ外現行標準ニ依リ機雷、爆雷、掃海具及水中聽音機ヲ裝備シ電路ノ水防ヲ完全ナラシムル爲主要部電線ハ裝艦ヲ使用ス

而シテ本艦型ノ實現ハ大正十五年度建造驅逐艦第三十五號(改稱吹雪型)ヨリセリ(大正十五年六月起工昭和三年八月竣工)

因ミニ本型ハ昭和三年一月起工ノ綾波型ヲ以テ小改良アルモ水雷兵裝ニ於テハ同一ナリ而シテ昭和四年末調査ニ依ルニ同時迄ニ本型竣工ノモノ吹雪以下十一隻起工濟ミノモノ八隻末起工ノモノ五隻合計二十四隻ナリ

(參考)

驅逐艦魚雷兵裝ニ關スル時代の考察ノ變遷暫見

驅逐艦魚雷兵裝ノ年次の進歩ハ既述ノ如クナルガ現在八年式魚雷發射管採用ニ至ル迄ノ時代の思想ノ變遷ニ就キ一言セムトス我國ニ於ケル驅逐艦ノ鼻祖遺業、東雲時代ノ四十五糎徑ハ當時ニ於ケル恰當ノ管徑トセラレシハ勿論明治四十四年五十三糎魚雷採用以後ニ於テモ其ノ爆發威力ノ不足ヲ感得シツツモ尙九十三糎魚雷ノ如キハ軍艦用ト爲シ近距離襲撃多數發射ヲ主トスベキ驅逐艦ニ於テハ四十五糎徑ヲ以テ概ネ満足セザルベカラズトセリ蓋シ徒ニ艦型ノ増大ヲ招徠シ尙取扱ヒ驅逐艦用トシテ不適トセルニ在リ然レドモ四十五糎徑ニ甘ンズルニアラザリシハ單裝發射管ガ海風埃及穢級ニ於テ聯裝發射管ニ進ミタルヲ見ルモ明カナル所ナルガ而カ

モ此ノ間魚雷ノ標的タルベキ主力艦々型ノ増大特ニ水中防禦ノ進歩較々止マズ驅逐艦魚雷兵裝ニ於テモ何等カノ手段ニ依リ更生ノ策ヲ講ズルノ必要ニ迫ラレツツアリシニ當リ偶々大正元年海風、山風ノ二艦就役シ同隊司令海軍大佐大島正毅及同驅逐艦長中佐桑島省三ヨリ夫々使用實驗ニヨル詳細ナル意見ヲ提出セリ特ニ後者ハ將來ノ一等驅逐艦ニ就キ詳説スル處アリ其ノ要左ノ如シ

二十一吋魚雷發達ノ今日水雷戰ヲ主用スベキ一等驅逐艦ニアリテハ此ノ種魚雷採用ノ必要アルハ明カナリ然レドモ十八吋魚雷ト雖已ニ速力ヲ増進シ射程ヲ延長セルヲ以テ本來晝夜戰ヲ間ハズ何レノ場合ニモ敵ニ近接肉迫スベキ驅逐艦ニ在リテハ無下ニ之ヲ塞ツベカラズ即チ其ノ採擇ノ要點ハ六門ヲ備フルニ至ル迄其ノ備へ得ル數ニ依リテ決セザルベカラズ假令バ二十一吋四門ト十八吋六門トヲ比較セバ後者ヲ採用スルヲ可トスルコト之レナリ蓋シ晝間襲撃ニ於テ一撃必中ノ撒布射帶ヲ構成センニハ六門即チ六射線ヲ絕對必要トスレバナリ

又他ノ一部ニ於テハ驅逐艦ノ理想的魚雷兵裝トシテ十八吋三聯裝發射管三基ヲ以テセンコトヲ提唱セル者アリ
右ト相前後シテ英國ニ於テハ驅逐艦ニ五十三糎徑發射管搭載ノ情報アリ大正元年特ニ浦風、江風ノ二隻ヲ試驗的ニ英國ニ註文シ五十三糎徑發射管ノ裝備ヲ命セシガ成績概シテ良好ニシテ其ノ取扱意外ニ容易ナルヲ認メシト共ニ恰モ歐洲大戰勃發シ殆下一電一報毎ニ魚雷(機雷)裝藥量ノ増加ヲ急トスル資料タラザルハ無キ狀況ヲ觀取スルニ及ビ茲ニ大正六年驟然五十三糎徑發射管ノ採用ニ決シ驅逐艦峯風級ヨリ其ノ實現ヲ見ルニ至リシモノナリ

大正八年八式魚雷ノ採用ヲ見タルガ而カモ驅逐艦ニ八年式ヲ採用セムトスル要望ノ如キ極メテ尠ク驅逐艦ニ於テ全長八、四米餘ノ長大魚雷ノ操作ノ如キ思モ寄ラザルモノトスル者多數ニシテ翌九年十月開催ノ技術會議ニ於テモ八年式徑ヲ採用セムトスル積極的意見ハ寧ロ微力ナリキ而シテ當時恰モ海軍水雷學校ニ於テ八年式魚雷實地發射ニ堪フル練習艦船ナク止ムナク應急策トシテ當時同校練習驅逐艦タリシ浦風ニ假裝備スルコトトナリ十一月八月其ノ後部五十三糎二聯裝發射管一基ニ代フルニ八年式二聯裝發射管一基ヲ裝備セシメシガ實驗ノ結果其ノ取扱上ニ於テモ大ナル困難ナク又艦ノ安定性操縱性等ニモ變化ヲ起スガ如キコトナキコト恰モ上記セル四十五糎徑ヲ五十三糎徑ニ改メタル既述狀況ト殆下其ノ結果ヲ同フセルヲ發見セルト爾後進歩セル戰術的要求トハ既記ノ如ク遂ニ驅逐艦陸月ヨリ八年式徑ヲ採用スルニ至リシモノナリ而シテ大正十五年起工ノ驅逐艦吹雪ニ於テ本徑發射管(魚雷)兵裝

ノ極限(三聯裝三基)ニ達セルモノナリ

今叙上ノ經過ヲ軍艦ノ夫レニ比較スル時ハ同一兵器ノ裝備ニ於テ兩者相當ノ時間の差異アルヲ觀取シ得ベシ蓋シ之ガ主因トモ認ムベキモノハ (一)驅逐艦(水雷艇、潜水艦等亦同シ)ニ在リテハ操縦性ト潜航性ノ豐富ヲ期セムガ爲船體ノ増大ヲ極度ニ嫌忌セルコト (二)魚雷取扱操作ノ輕易敏捷ヲ必須トセル觀念ハ止ムヲ得ズ破壊力ノ強大ナル魚雷ノ採用ヲ躊躇セシメタルニ在リ即チ左ノ如シ

各種艦艇魚雷發射機初裝備年代比較表

考 備	飛行機	潜水艦	水雷艇	驅逐艦	軍艦	艦別		發射機徑	
						年次	艦艇名	年次	艦艇名
一、年次ハ起工年月 二、記號左ノ如シ △……改裝又ハ半途始裝 ()……試驗的裝備 ×……試驗開始	/	/	明治廿一年	/	明治十七年	年次	三十一號	年次	三十六號
	/	/	×第一號艇 (發射機)	/	×扶桑(速)	年次	四十五號	年次	五十三號
	△大正四年	三十七年	×四十二年	三十年	二十七年	年次	五十三號	年次	八號
		第一號	×一等艇	叢雲	富士	年次	八號	年次	式
		大正十年	/	(大正七年) 浦風	四十四年	年次	八號	年次	式
		伊五一	/	(十三年) 浦風	九年	年次	八號	年次	式
		/	/	(十三年) 浦風	長良	年次	八號	年次	式
		/	/	(十三年) 浦風	長良	年次	八號	年次	式